

自選 荷風百句

永井荷風

青空文庫

自選 荷風百句序

わが発句の口吟こうぎん、もとより集にあむべき心とてもなかりしかば、書きもとどめず、年
 とともに大方おおかたは忘れはてしに、おりおり人の訪来とらいりて、わがいなむをも聴かず、短冊色し
 昏きしなど請こわるるものから、是非もなく旧句をおもい出いだして責せめふさぐことも、やがて度たびか
 重さなるにつれ、過ぎにし年月、下町うちのあなたに佗わびずま住まいして、朝夕の湯帰りに見て
 すぎし町のさま、又は女どもと打うちつどいて三味線さみせん引きならいたる夜々のたのしみも、亦お
 のずから思返おもひかへされて、かえらぬわかき日のなつかしさに堪たえもやらねば、今はさすがに棄
 てがたき心地こころせらるるものを扱えらみて、老おいの寢覚ねざめのつれづれをなぐさむるよすがとはなしつ。

昭和丑うしのとし夏五月

荷風散人

春之部

墨も濃くまづ元日の日記かな
すみこ

正月や宵寐の町を風のこゑ
よひね

暫の顔にも似たりかざり海老
しばらくかほ えび

羽子板や裏絵さびしき夜の梅

子を持たぬ身のつれくや松の内

九段坂上の茶屋にて
うへ

初東風や富士見る町の茶屋つゞき
はつこち

まだ咲かぬ梅をながめて一人ひとりかな

清元なにかしに贈る

青竹あをだけのしのび返がへしや春の雪

市川左団次ぢやうたばこいれ丈煙草入の筒に

春の船名所ゆびさすきせる哉かな

自画像

永き日やつばたれ下さがる古帽子ふるぼうし

浅草画賛

永き日や鳩も見てゐる居合拔ゐあひぬき

柳嶋やなぎしま画賛

春寒はるさむや船からあがる女づれ

葡萄酒ぶだうしゆの色にさきけりさくらさくら草くさ

紅梅こうばいに雪のふる日や茶のけいこ

出でそびれて家にゐる日やさし柳

銀座裏あゐるの或酒亭にて二句

よけて入る雨の柳や切戸きりどぐち口

傘さゝぬ人のゆきゝや春の雨

妓楼あんどうの行燈あんどうに

しのび音ねも泥の中なる田螺たにし哉

室むろ咲さきの西洋花ばなや春寒し

日のあたる窓の障子しやうじや福寿草ふくじゆさう

うぐひすや障子にうつる水の紋あや

色町や真昼しづかに猫の恋

画賛

門かどの灯ひや昼もそのまゝ糸いとやなぎ柳

石垣にはこべの花や橋はし普請ふしん

送別二句

箆きふを負おふうしろ姿や花のくも

行先ゆくさきはさぞや門出かどでの初ざくら

鼩いたち鳴く庭の小雨こあめや暮くれの春

行春ゆくはるやゆるむ鼻緒はなをの日ひ和下よりげ駄

春惜をしむ風ひとひの一日ひとひや船うへの上

夏之部

夕風ゆふかぜや吹くともなしに竹の秋

よし切きりや葛かつしか飾かひろき北きたみなみ

待つ人の来ざりしかば
くひな
 水雞さへ待てどたゝかぬ夜なりけり

築地閑居

夕河岸の鱒売あぢうる声や雨あまあがり

御家人ごけにんの傘張る門かどや桐の花

明あけやすき夜よや土蔵どぐらうの白き壁

青梅あをうめの屋根打つ音や五月寒さつきさむ

八文字はちもんじふむや金魚のおよぎぶり

荷船にぶねにもなびくのぼり幟こあみがしや小網河岸

四月十八日

物干ものほしに富士やをがまむ北斎忌ほくさい忌

芍薬しゃくやくやつくゑの上の紅楼夢こうろうむ

卯の花うの花や小橋こはしを前まへのくゞり門

百合ゆりの香かや人待かどつ門うすつきよの薄月夜

蝙蝠かうもりやひるも燈ひともす楽屋口がくやぐち

石菖せきしやうや窓から見える柳ばし

一ツ目ひとめの橋や墨絵のほとゝぎす

向嶋水神すゑじんの茶屋にて

葉ざくらや人に知られぬ昼あそび

散りて後悟のちるすがたや芥子けしの花

わが儘ままにのびて花さく薊あざみかな

あぢさるや瀧夜叉たきやしやひめ姫が花かざし

拝領いちぢくの一軸古ふるりし牡丹ぼたん哉かな

涼しさや庭のあかりは鄰となりから

枝刈りて柳すゞしき月夜哉

涼風を腹一ぱいの仁王かな

鞆ながら筆もかびけりさつき雨

五月雨の或夜は秋のこゝろ哉

住みあきし我家ながらも 青簾

蚊ばしらを見てゐる中に月夜哉

藪越しに動く白帆や雲の峯

中洲眺望

深^{ふかがは}川^がや低^{やなみ}き家^や並^{なみ}のさつき空

みち潮^{しほ}や風も南のさつき川

妓^ぎの持^{あふぎ}ちし扇^{あふぎ}に

気^{あふぎ}に入^{あふぎ}らぬ髪^{あふぎ}結^{あふぎ}直^{あふぎ}すあつさ哉

秋^{あき}近^{あき}き夜^よふけの風や屋根の草

秋之部

蘭^{らん}の葉^{あは}のとがりし先^{さき}や初^{はつ}嵐^{あらし}

稻^{いなづま}妻^まや世^よをすねて住む竹の奥

女の絵姿に

半襟はんえりも蔦つたのもみぢや窓の秋

四谷怪談画賛四句

初汐はつしほや寄る藻もの中なかに人の骨

櫛しきび売るこいへ小家の窓や秋の風

人のもの質しちに置きけり暮の秋

川風も秋となりけり釣つりの糸

象ぞうも耳立て、聞かや秋の風

鯨はぜつりの見返る空や本願寺ほんぐわんじ

庭下駄にはげたの重きあゆみや露はぎの萩

かくれ住む門かどに目立つや葉はげいとう鶏頭

浅草あさくさや夜長よながの町ふるぎみせの古着店

糸屑いとくづにまじる柳ひとはの一葉ひとかな

病中の吟

粉薬こなすりやあふむく口に秋の風

降り足らぬ残暑の雨や屋根ちりの塵

秋の雲雨ならむとして海の上

ひきしほ
引汐や蘆間にうごく秋の雲

ものた
物足るや葡萄無花果倉ずまひ

しばぐち
芝口の茶屋金兵衛にて三句

もりしほ
盛塩の露にとけ行く夜ごろかな

ゆず
柚の香や秋もふけ行く夜の膳

あゆ
秋風や鮎焼く塩のこげ加減

さざなみうし
小波大人追悼

ごくらつく
極楽に行く人送る花野かな

妓の写真に

吉日きちにちをえらむ弘ひろめや菊きく日和びより和

行秋ゆくあきや雨にもならで暮るゝ空

秋雨あきさめや夕ゆふげ餽はしの箸はしの手くらがり

雨やんで庭しづかなり秋あきの蝶てふ

昼月ひるづきや木こずこゑこに残る柿かき一ひとツ

冬之部

初霜はつしもや物もの干ほし竿ぎをの節ふしの上うへ

降りやみし時雨のあとや八ツ手の葉

釣干菜それ者と見ゆる人の果

箱庭も浮世におなじ木の葉かな

古足袋の四十もむかし古机

代地河岸の閑居二句

北向の庭にさす日や敷松葉

垣越しの一中節や冬の雨

よみさしの小本ふせたる炬燵哉

小机こづくゑに墨摺する音や夜半よはの冬

冬空や麻布あざぶの坂あがの上りおり

門もんを出でて行ゆく先さきまどふ雪見ゆきみかな

雪ゆきになる小降こぶりの雨や暮くれの鐘かね

湯ゆ帰がへりや燈ひともしころの雪もよひ

窓の燈やわが家やうれしき夜よるの雪

寒よき夜や物読よみなるゝ膝ひざの上うへ

冬ふゆざれや雨あめにぬれたる枯葉かれはだけ竹

襟えりまきやしのぶ浮世うらとほりの裏うらとほり通とほり

落おちる葉はは残のこらず落おちちて昼ひるの月つき

落おち残のこる赤あかき木きの实みや霜しも柱はしら

荒あれ庭にはや桐きりの实みつゝく寒かん雀すずめ

昼間ひるまから錠ぢやうさす門かどの落葉らくえつ哉や

冬空ふゆぞらや風かぜに吹ふかれて沈しづむ月つき

寒かん月げつやいよく冴さえて風かぜの聲こゑ

小松川漫歩三句

あちこちにわか分るゝ水や村むらちどり千鳥

寒き日や川におちこ落込む川の水

大根だいこ干す茅かやの軒端のきばや舟ふなだいく大工

下駄か買かうてたんす箆筒たんすの上や年の暮

麻布閑居

座布ざぶとん団わたも綿わたばかりなる師しはす走す哉

行年ゆくとしやとなり鄰となりうらやむ人の声

青空文庫情報

底本：「麻布襟記——附・自選荷風百句」中公文庫、中央公論新社

2018（平成30）年7月25日初版発行

底本の親本：「荷風全集 第十四卷」中央公論社

1950（昭和25）年10月25日発行

初出：「おもかげ」岩波書店

1938（昭和13）年7月10日

※「灯《ひ》」と「燈《ひ》」の混在は、底本通りです。底本の親本、「おもかげ」岩波書店1938年7月10日第1刷発行、「おもかげ」岩波書店1938年7月30日第2刷発行、「荷風句集」細川書店1948年2月25日刊行では、「灯」に統一されています。

※表題は底本では、「[#割り注]自選[#割り注終わり]荷風百句」となっています。

※ルビの誤植を疑った箇所を、「荷風全集 第二十卷」岩波書店、1985（昭和60）年4月5日発行の表記にそって、あらためました。（底本の「編集付記」に「難読と思われる語には岩波書店版『荷風全集』等を参照し、新たにルビを付した」とあるので）

入力：kompass

校正：砂場清隆

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白選 荷風百句

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>